

2025 年度地質標本館における博物館実習

中村 由美¹・兼子 尚知¹・川辺 禎久¹・瀬口 寛樹¹・中澤 努¹

1. はじめに

地質標本館では、博物館の学芸員資格取得に必要な博物館実習を1993年度以降継続して行っています(中村ほか, 2021, 2022, 2025)。2025年度は、8月18日(月)～22日(金)および8月25日(月)～29日(金)の10日間、8大学から博物館実習生8名を受け入れ実習を行いました。本稿では、実習の様子を報告いたします。

2. 実習内容

実習1日目(8月18日): 館内見学, 収蔵庫見学, 地質図ライブラリー見学, 地質試料調製グループ見学

実習2日目～5日目(8月19日～22日): イベント実習

実習6日目, 7日目(8月25日, 26日): 標本清掃

実習8日目, 9日目(8月27日, 28日): 個人課題, グループワーク

実習10日目(8月29日): 個人課題発表

3. イベント実習

実習の前半日程では、イベント開催のための実践的な実習を行いました。実施するイベントは、化石クリーニング体験教室です。化石原石をハンマーとタガネを使って割り、化石を取り出す、あるいは出てきた化石を覆う岩石をタガネなどで取り除くクリーニング作業と化石の鑑定をするというものです。前回の実施は2019年(利光ほか, 2023)、新型コロナウイルス感染症拡大の影響や担当職員の異動等があり5年ぶりの開催となりました。

実習生はまず道具の扱いに慣れることから始め、化石原石をひたすら割って練習をします。使用する化石原石は、栃木県那須塩原市の「木の葉化石園」の葉理泥岩で、木の葉化石が多く含まれています。道具の取り扱い方、特に力加減に苦戦している実習生も見受けられましたが、何度も練習するうちにコツをつかみ上手く割ることができるようになったようです(写真1)。今回の練習に使用した化石原石からは、木の葉化石のみならず昆虫化石も多数発見され思



写真1 化石クリーニング練習の様子。

わぬ収穫となりました(写真2)。良い状態の木の葉化石や珍しい昆虫化石等は、研究に使用するため当館に保管をお願いしています。

原石割り練習の合間には、木の葉化石の同定方法について講師からレクチャーを受けました(写真3)。同定の最終判断は講師に委ねられるものの、まずは自分で観察し推測することが重要です。判断するポイントを教えてもらい大まかなグループまで絞り込むことは容易でしたが、出てくる化石の状態は様々で葉の種類を特定することは大変難しかったです。このスキルを高めることで、参加者が自ら割って出した化石をポイントを押さえて一緒に観察することができるようになります。実習生からは少々不安の声も聞かれましたが、「数をこなして見分けられるようになりたい」と練習に精を出していました。

実習生には参加者への指導者役を担当してもらったほか、2班に分かれ説明役も担ってもらいました。説明は、化石研究の意義・塩原の木の葉化石のでき方・体験の注意事項についてです。原稿の読み上げ練習をするうちに各班から意見が出され、説明時の立ち位置や道具を使い説明をするなど、伝え方の工夫をしながら取り組んでいました。

イベントは午前と午後の2回実施しました。対象は小学校5年生から高校生で、各回定員8名を抽選で決定しまし

¹ 産総研 地質調査総合センター地質情報基盤センター

キーワード: 地質標本館, 博物館実習, 学芸員, 展示解説, 展示標本清掃, 岩石薄片, 化石クリーニング, 木の葉化石



写真2 見つかった昆虫化石とその拡大写真。



写真4 イベントの様子1。

た。

午前の部では、小学生6名・中学生1名・高校生1名の計8名に参加いただきました。初めに実習生から説明と体験の注意事項が伝えられ、作業へと移ります。緊張している様子の実習生でしたが、最初の説明が滞りなく進むと安堵の表情が覗えました。また、作業が始まると参加者と会話をしつつ、必要なサポートをしながら進めていくことができていました(写真4)。イベント終了後の参加者アンケートには、「わかりやすかった」「丁寧な対応だった」等の感想を頂くことができました。

午後の部では、小学生6名と高校生1名の計7名に参加いただきました。実習生も少し慣れた様子で、参加者の年齢等を考えながら作業のアドバイスができていました。特に道具の取り扱いに苦労している参加者が多く、実習生が適度に手伝いながら進める様子が見受けられました(写真5)。参加者からは、「タガネの当て方やハンマーの力加減が難しかったけれど、きれいにクリーニングできて良かった」等の感想を頂きました。懸念していた最後の木の葉化石の鑑定も、資料を活用しながら参加者と一緒に考え予想するなど適切な対応ができたようです。

4. 標本清掃

4人1組の2班に分かれ、第4展示室の岩石・鉱物棚の清掃を2日間行いました。職員から清掃方法のレクチャーを受け、まずは標本を展示ケースから慎重に取り出すところから開始です。ほとんどの実習生が標本を取り扱うのは初めてで緊張していましたが、実習生同士で連携を取りながら丁寧に作業を行っていました。実際に標本に触れてみ



写真3 講師による指導の様子。



写真5 イベントの様子2.

ることで、色や形・重さ等を把握でき標本そのものに関して理解が深まったようです。

標本の取り扱いに慣れると、展示方法にも気を配れるようになります。例年よりも標本の展示方法について実習生から意見が出され、標本の向きや位置等を試行錯誤していました。実習生だけではなくなかなか意見がまとまらず、職員が判断をする場面もありましたが最終的により良い展示となりました。

5. グループワーク

グループワークでは「時節展示を考えてみよう」というテーマで、2人1組の4班に分かれて行いました。春夏秋冬の季節をそれぞれの班に割り振り、その季節に連想される標本を選定し展示構成を考えるというものです。時節展示は当館で実際に試みている企画で、職員がアイデアを出し常設の展示標本や収蔵標本を活用し展示しています。各班が考案したものは以下の通りです。

【春】花から着想し、花や植物に関連する名前がついた鉱物を選定(第1図)。

【夏】花火の炎色反応から着想し、様々な色の鉱物を選定(第2図)。

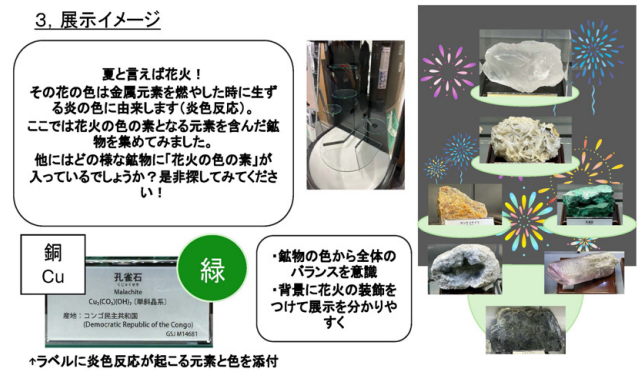
【秋】秋の山から着想し、紅葉と滝をイメージした鉱物と植物化石を選定(第3図)。

【冬】バレンタインデーから着想し、チョコレートのように見える鉱物と岩石を選定(第4図)。

実習生ならではの自由な発想かつ実現可能な展示企画

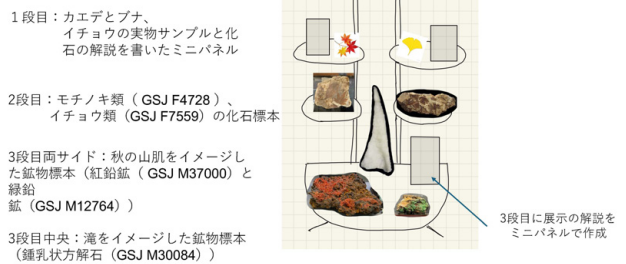


第1図 実習生考案の時節展示(春)。



第2図 実習生考案の時節展示(夏)。

3、実際の展示イメージ



第3図 実習生考案の時節展示(秋)。



第4図 実習生考案の時節展示(冬)。



写真6 個人課題発表の様子1.



写真7 個人課題発表の様子2.

で、職員からも「今後の展示の参考にしたいアイデアがあった」等の感想が寄せられました。

6. 個人課題

個人課題は、例年出題している「一点解説」です。常設展示の中から“一点”を選び解説を作成するというもので、最終日に発表を行います。地質に関する専門知識を問うものではなく、実習生の専門分野を活かしつつ展示解説を作成してもらいます。人によってはなかなか難しい課題ですが、今年度の実習生もまた上手く自分の分野と融合させた

発表をしてくれました(写真6, 7)。発表を聴いた職員からは「毎年新たな視点の発見になる」との声があり、お互いに有意義な時間となりました。

7. おわりに

今年度も無事に実習を終えることができました。短い実習期間の中で、博物館で働くということがどういうことなのかを知る機会になったかと思います。学芸員資格取得に限らず、将来を考えていく上での一助となるような経験になれば幸いです。

謝辞：博物館実習においては、地質標本館委託保守受付の皆様、地質情報基盤センター地質標本館室地質試料調製グループ・運営グループの皆様、同センターアーカイブ室の皆様、地質情報研究部門の辻野 匠氏、連携推進室の利光誠一氏にご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

文 献

中村由美・森田澄人・兼子尚知・利光誠一(2021)2020年度地質標本館における博物館実習。GSJ地質ニュース, 10, 56-59.

中村由美・森田澄人・兼子尚知・利光誠一(2022)2021年度地質標本館における博物館実習。GSJ地質ニュース, 11, 252-255.

中村由美・森田澄人・兼子尚知・川邊禎久(2025)2024年度地質標本館における博物館実習。GSJ地質ニュース, 14, 111-115.

利光誠一・兼子尚知・辻野 匠・中島 礼(2023)尾上亨さんと地質標本館「化石クリーニング体験学習」イベント。GSJ地質ニュース, 12, 272-275.

NAKAMURA Yumi, KANEKO Naotomo, KAWANABE Yoshihisa, SEGUCHI Hiroki and NAKAZAWA Tsutomu(2026) Curatorial practice at the Geological Museum, GSJ, AIST in 2025FY.

(受付：2026年2月17日)